

学生の力は偉大だ！

“被災者（地）の力になりたい”

学生を支援する事業

堀内美由紀

畿央大学健康科学部看護医療学科

仮説

- 学生たちはケアの担い手になり得る
- 多くの学生は何かしたいと考えている
- その一歩が踏み出せないのは
 - ✓ 交通費や宿泊費など経済的負担
 - ✓ 自己効力感の不足

背景1

- ・ケア提供者の絶対的不足
- ✓ 被災者 > 専門家



背景2

- のびのびキャンプ2011
- ✓ さつきちゃんをケアする
マンツーマンプログラム
- ✓ お母さんたちの心のレスパイト



被災地の子ども
たちが皆、トトロ
に会えるように！

学生 &

子どもたちの変化



背景3

- 教育者としての役割
 - ✓ 学生個々の成長へのアシスト
 - ✓ 社会が求める人材の輩出



目的

- 学生たちが被災者の「側にいる」体験をする
- 安寧な生活・平和の意味や意義，人の優しさや強さ，人間の弱さと助け合い方法を考える
- 具体的な復興支援への貢献について模索する機会とする

● 今回の事業に参加した学生の内訳

- **大学生12名(教育学部10名健康科学部2名)**
 - 4回生3名(男子2名, 女子1名)
 - 3回生6名(男子1名, 女子5名)
 - 1回生3名(女子3名)

*** 全員のびのびキャンプ2011のメンバー(1名は準備のみ)**

*** 教育学部には養護教諭課程を専攻している学生を含む**

活動1 キャンプ企画運営と遠足引率

- キャンプ地でのレクリエーションプログラムの企画と準備およびバス遠足の引率補助
- 子どもたちの安全かつ楽しい遊びをサポートすること

対象：福島県A市の市民ボランティアグループによって募集・選考された1歳から12歳までの子ども27名

- * 保護者4名(内2人はご夫婦)も参加
- * 発達障害や筋ジストロフィなどの理由で一般のキャンプへの参加が難しい児童も受け入れた

活動2 仮設住宅訪問

- 茶話会
- 理学療法学科学生によるあそびリテーション
(遊び+リハビリ)の紹介

対象：津波と原子力発電所事故による避難者が多く暮らす福島県A市内に設置された仮設住宅に暮らす住民、イベント開催のお知らせで集会所へ集まった方々

学生への支援内容

- 交通費および宿泊費の助成
- 受け入れ先の提案
- 受け入れ先との調整
- 移動手段と宿泊施設の予約

学生たちが担当したこと

キャンププログラムの内容を検討し準備する

評価

- グループディスカッションの内容を質的に検討
 - Open Question: 福島に来ました！どうですか？

ケアの定義: ミルトン・メイヤロフ『ケアの本質』

その人が成長すること, 自己実現することを助けることとしてのケア

- 217のコンテクスト, 19の内容に集約

⇒ <自分にできる貢献・役割>

<被災者(地)が抱える問題への理解>

<活動中に関わった方々からの学び>

<自分自身の変化> の4つのカテゴリーに分類

● 学生が大学や教員に望む支援 ●●●

情報の提供

- 被災地のニーズや受け入れの状況



情報の入手方法がわからない
情報の信頼性を判断できない
マスメディアの情報だけでは不安

大学の主催

- 保護者の承認や安心感
- グループで体験したことを共有できる

資金の助成

- 「無いよりはあった方がいいけど・・・」
(予測に反し高い評価ではなかった)

ケアの担い手としての適性

- 青年期の特徴＝境界人(Kurt Lewin)
 - 相互反転的かつ間身体的関わりを可能にする
 - 専門家ではない入りやすさ



まとめ

- 看護の基本「対象者に寄り添う」という行為は、看護師だけの業ではない
- 自身の資質に気付いていない学生は多い
- ボランティア初心者にはグループでの取り組みは有効
- 教育職＋看護職に期待される復興支援
⇒ 自己効力感を高める機会の提供

看護師の育成に留まらず

寄り添うという“素朴な”ケアの担い手の育成